

金正日の外国人拉致

西岡 力

救う会「拉致の全貌と解決策」調査プロジェクトリーダー

北朝鮮による拉致は、1977年、1978年に全世界で集中的になされた。これは本報告別論文において明らかにしたように、1974年に後継者に公式指名された金正日が、1975年対南工作機関に集中検閲を実施し、翌1976年に出した新方針の中で、工作員現地化教育のために拉致をせよと命じたことに起因している。

現段階で明らかになっている拉致被害者は、12カ国におよぶ。日本と韓国を除く10カ国の拉致がすべて1978年頃に集中している。日本でも政府認定17人のうち、13人が77年と78年の2年間に集中している。韓国でも漁船の拿捕による拉致を除くと、77年、78年に拉致が集中している。

12カ国の被害者のうち、韓国、日本、中国、タイ、レバノン、ルーマニアの6カ国の被害者は身元を明らかにする確実な情報があり、家族も名乗り出ている。シンガポール、マレーシア、ヨルダン、フランス、イタリア、オランダの6カ国被害者については北朝鮮による拉致であることを示す有力情報が確認されているが身元はまだ明らかになっていない。本論文では日本と韓国以外の外国人拉致について整理しておく。

1 タイ人拉致

帰国した拉致被害者曾我ひとみさんとその夫ロバート・ジェンキンスさん夫妻は、2005年「ジェンキンスさんと同じような脱走米兵があと3人おり、その妻は全員拉致被害者で、タイ人のアノチャ Anocha さん、レバノン人のシハーム Shiham さん、ルーマニア人のドイナ Doina さんだった」とし、彼女らから聞いていた身元情報を詳しく証言した。

2005年10月、曾我・ジェンキンス証言がタイで大きく報道され、1978年7月2日、マカオで失踪したタイ人女性アノーチャーさんの家族が名乗り出た。同年11月家族会・救う会が家族と面談して調べたところ、失踪時期・場所「1978年7月・マカオ」、失踪経緯「自称日本人男性の観光案内をしているとき海岸で襲われ船に無理矢理乗せられた」、家族関係「父と兄一人」、失踪前の職業「ホテルのマッサージ師」が曾我・ジェンキンス証言と完全に一致した。タイ政府は北朝鮮政府に対して調査を要請したが、北朝鮮政府はそのような女性は国内にいないと回答した。

2 レバノン人拉致

曾我夫妻が証言したレバノン人のシハームさん拉致についてはすでに事件の概要が明らかにされている。1978年7月、Siham Shraidhiさんが他の3人のレバノン人女性とともに日本企業に就職させると騙されて北朝鮮に連れて行かれた。1979年、祖のうち2人がベオグラードで隙を見て脱出に成功した。レバノン政府が北朝鮮と交渉して残りの2人も1979年11月に取り戻した。しかし、シハームさんは北朝鮮で脱走米兵と結婚し妊娠中であつたため、再び北朝鮮に戻り、現在も北朝鮮に住んでいる。

3 ルーマニア人拉致

ルーマニア人被害者のドイナさんに関しては、曾我・ジェンキンス証言以外に情報が無い。1978年7月、イタリアで絵の勉強をしているときに、画家になるため香港あるいは日本に行こうとだまされ拉致され、脱走米兵と結婚し息子を二人もうけたという。1984年から曾我夫妻と同じアパートで暮らし、1997年に癌で死亡した。父はルーマニア人、母はロシア人で両親はルーマニアにいるという。2007年3月、ルーマニアのクライオヴァに住むルーマニア人拉致被害者ドイナ・ブンベアさんのお母さんペトゥラさんと弟さんガブリエル・ブンベアさんが名乗りを上げ、同年4月、筆者らがルーマニアでご家族に面会し、身元を確認した。

4 中国人拉致

タイ人女性アノチャさんが拉致された1978年7月2日に、二人のマカオ人女性が失踪している。アノチャさんと同じく自称日本人に観光案内を頼まれ、姿を消している。Hotel Lisboa 宝石店店員の Hong Leng-ieng さん（1957年生まれ）と So Mio-chun さん（1955年か1956年生まれ）だ。

一方、「Hongさんというマカオ人拉致被害者女性と親しくつきあっていた」と証言する韓国人拉致被害者がいる。1978年に北朝鮮に拉致され1986年に脱出した韓国人女優崔銀姫氏だ。

家族会・救う会は、2005年12月崔銀姫氏から Hong さんの身の上などに関する話を詳しく聞き取り、2006年1月マカオで孔さんの家族から確認作業をしたところ、家族構成「母親と弟一人がマカオにいる。マカオに逃げてくるとき一緒に来られなかった父親は中国本土に住む」、父母の職業「教師、針仕事」、学歴「高校時代バレーボールの選手、高校卒業後、大学に行きたかったが、弟を大学に進学させるため就職」、職業「宝石店店員、副業観光ガイド」、年齢「拉致されたとき20歳の夏」、宗教「カソリック」などすべてが一致した。また、崔氏は孔さんのバプテストネームが「マリア」だと証言したが、家族はそれを覚えておらず、後日教会に確認して間違いがないことが判明した。

2006年10月8日、訪中した安倍総理は晩餐会の席で温家宝・総理に「中国人で拉致された人はいるか」と尋ねたが、温総理は「確認されていない」と回答した。

2009年3月、北朝鮮元工作員金賢姫が救う会が韓国ジャーナリスト趙甲濟氏に提供した孔さんの写真を見て「1984年6月から8月まで、同僚工作員金淑姫といっしょに平壤市の北部にある龍城40号招待所でこの写真の女性によく似ているマカオ女性から中国語（北京語）基礎教育を受けた」「そのとき、私に北京語を教えた女性は私より年齢が5歳くらい上の『ミスコン（コンは孔の朝鮮語発音・訳註）』という方でした。典型的な中国美人でした。マカオから拉致されてきたと聞きました。北朝鮮に拉致されてきて収容されている最中に逃げ出してまた捕まったと言いました。崔銀姫氏が手記で会ったと書いたその人に間違いありません」と証言した。

また、韓国有力紙「朝鮮日報」が2009年11月17日付けで「過去10年間に、脱北者を支援してきた朝鮮族ら中国人多数が、北朝鮮に拉致されていたことが16日までに分かった。中国公安当局は約200人が拉致されたと推定しているもようだ。しかし、中国政府は自国民が拉致されていた事実を確認しながらも、北朝鮮に公式な問題提起を行っていない」と言う記事を掲載した。詳細については本プロジェクトでも調査中だ。

5 フランス人、イタリア人、オランダ人拉致

前述した通りレバノン人拉致被害者は1979年に救出されたが、その直後にレバノン政府の聞き取り調査を受けた。『EL NAHAR』（レバノンのアラビア語新聞）1979年11月9日付には、そこで彼女らがヨーロッパ人拉致について次のような証言をしたと報道されている。

「パスポートを没収された後、ある施設に移送された。同施設では、柔道、テコンドー、空手のほか、盗聴などあらゆるスパイ活動のための訓練が行われ、金日成思想への洗脳も行われた。同施設には28人の若い女性があり、その中にはフランス人3人、イタリア人3

人、オランダ人2人、その他中東や西ヨーロッパからきた女性が含まれていた。また、彼女らは反抗することが不可能であった。』なお、現在レバノンや米国などに住む3人の被害者女性は北朝鮮のテロを恐れているためか、マスコミの取材を拒否し沈黙を守っている。

フランス人拉致被害者については、韓国人拉致被害者の崔銀姫氏の次のような具体的な証言がある。

「フランスに派遣されていた職員は、東洋の富豪の子息のふりをして、これと思った女性に接近、物量攻勢で誘惑した。そのフランス女性は虚栄心が強かったのか、誘惑に負け職員と婚約するに至った。

職員は婚約者に婚約記念旅行をしようといって中国に連れて行き観光旅行をさせたのち北朝鮮まで連れて来た。

平壤空港に到着すると、その職員はどこかに消えて、代わりに別の職員が現れ、その女性を引き受けた。フランス女性が婚約者を探してほしいと頼むと、新しく担当した職員が、「そんな人はここにはいない」といって、彼女を招待所に軟禁し、洗脳工作を始めた。」(崔銀姫・申相玉『闇からの罅・下』文春文庫31~32頁)。

崔氏は家族会・救う会に、「この情報を伝えてくれた人物は、招待所の中だけを巡回する理髪師の男性だ」と明らかにした。

また、大韓航空機爆破テロの犯人である元北朝鮮職員金賢姫は著書の中で、崔証言とほぼ重なる以下のような拉致被害者を主要する施設に勤める世話係の女性から聞いた話を記している。

「この前拉致されてきたかわいい外国人の女性がいたんだけど、北朝鮮職員にだまされて連れてこられたんだって。北朝鮮にくるやその職員はどこかに消えてしまい、その外国人女性は自分を連れてきた職員を探してくれと何回も頼んだけど、たわごとを言うな、と毎日殴られていたのよ」(金賢姫『忘れられない女 李恩恵先生との二十ヵ月』文春文庫248~249頁)。

6 ヨルダン人拉致

崔銀姫氏は北朝鮮で、拉致被害者である可能性が高いヨルダン人に会っている。家族会・救う会が崔氏から聞き取ったヨルダン人情報は以下の通り。

1978年12月から79年春頃、平壤・東北里招待所4号閣に住んでいた。散歩中に一度出会い、言葉を交わした。「ヨルダンから来た」といっていた。20代に見えた。崔はそのとき手編みした毛糸の帽子をかぶっていた。

招待所の職員を通じてその帽子はどこの外貨ショップで売っているのかと尋ねられ、手編みだと答え、その後で彼女のために毛糸の帽子を編んで贈り物した。クリスマスにハンカチーフをお返ししてもらった。

大きな声で指導員に不満を言っているのを木の間から目撃したことがある。指導員とともに比較的自由に買い物などに行っていた。

スパイ訓練を受けた後、北朝鮮から出てスパイとして活動しているのかも知れないと推測している。

ちょうどその頃、ヨルダン国王が北朝鮮に来た。自分の国の人間がここに拉致されているのに、北朝鮮当局から歓迎されておかしいと感じた。

7 マレーシア人、シンガポール人拉致

1978年8月20日、5人の女性が拉致される事件が起きている。自称日本人の男性2人がエスコートガール会社に船上パーティーへ女性の派遣を依頼し、派遣された19歳から24歳の女性5人が船ごと行方不明となった。マレーシア人 Yeng Yoke Fun,22、Yap Me Leng,22、Seetoh Tai Thim,19、Margaret Ong Guat Choo,19、とシンガポール人 Diana Ng Kum Yim,24歳、だ。

2005年、5人の写真を見たジェンキンズさんが、そのうち Yeng Yoke Fun さんについて「1980年から81年にかけて目撃した平壤の遊園地の売店で働いていた女性と似ている」と証言した。

先述のごとくマカオで起きたタイ人、中国人拉致事件の犯人もやはり自称「日本人」だったが、その似顔絵をシンガポール警察がエスコート会社経営者に見せたところ、「5人を

拉致した犯人とそっくりだ」と証言した。

Yengさんの兄が2005年12月16日、クアラルンプールのマレーシア華人協会(MCA)の会館で記者会見して、妹の救出を訴えた。

一方、この事件との関係は明らかではないが、崔銀姫氏は北朝鮮抑留時に招待所のおばさんから「マレーシア人の夫婦が別の招待所にいる」ときいている。

8 12カ国からの拉致の背景

全世界で起きた北朝鮮による拉致事件は、1970年代後半に集中している。

事件発生時期が明確なタイ人、レバノン人、中国人、マレーシア人、シンガポール人拉致は1978年に事件が起きている。フランス人、イタリア人、オランダ人、ヨルダン人、ルーマニア人拉致も70年代後半になされたことは証言などから明らかだ。日本人拉致も70年代後半に集中している。韓国でも1977年から78年に海岸で5人の男子高校生が拉致する事件が連続して起きている。

元北朝鮮工作員の安明進氏は「拉致は遅くとも1960年代からあったが、本格化するのは70年代中頃からだ。74年金正日が後継者に選ばれた後まず手を伸ばしたのが資金、人材のすべてが優先的に回されている朝鮮労働党対南工作部門だ。金正日は工作部門を掌握するために、74～75年にそれまでの工作活動を検閲し、その成果はゼロだったと批判した。そして、『工作員の現地人化教育を徹底して行え。そのために現地人を連れて来て教育にあたらせよ』という指示を出したのだ。その指示により、日本人をはじめとして韓国人、アラブ人、中国人、ヨーロッパ人が組織的に拉致された。自分はこのことを金正日政治軍事大学で、金正日のおかげでいかに対南工作がうまくいくようになったかという例として学ばされた」と証言している。安明進氏以外の複数の元工作員もほぼ同じ内容の証言をしている。

北朝鮮の独裁者金正日こそが全世界で多くの人々を拉致した、許し難い国家テロの首謀者である。

【参考資料】レバノン紙(アラブ語)「EL NAHAR紙」1979年11月9日付け記事

全文和訳

公安による調査の中で北朝鮮からの帰還者 2 人はスパイ活動の訓練を受けた

公安部長であるファールーク・アビー・アルムルマウは司法当局に対し、スパイ活動をさせるため北朝鮮にレバノン人女性 4 人を派遣したスパイ網に関与している嫌疑で、レバノン人男性への逮捕令状を請求した。

公安の担当部署は、レバノン外務省が駐レバノン北朝鮮通商代表部部長に働きかけた後、数日前にようやくレバノンに帰還したシハーム・シュライテフ、ハイファ・サカーファに対する調査を行い、同調査に基づいて令状の請求を行った。

最初の調査によると、同レバノン人男性は当初、現在の劣悪な社会情勢に苦しむ若いレバノン人女性をターゲットにしており、東京または香港のいずれかのホテルでの仕事を口実に、4 人のレバノン人女性を誘い出すことに成功した。その仕事の賃金は、月給 1,500 ドルに加え、契約成立後に支度金として 3,000 ドルを支払うというものであった。

4 人の女性らがパスポートと荷物を準備した後、同レバノン人男性が東京までのチケットを用意した。その女性らは飛行機に乗り、東ヨーロッパのある国の首都にある空港に降り立ち、その後、いくつかの空港を経由して北朝鮮の首都平壤に到着した。

シハームとハイファ、またその他の 2 人は、パスポートを没収された後、ある施設に移送された。同施設では、柔道、テコンドー、空手のほか、盗聴などあらゆるスパイ活動のための訓練が行われ、金日成思想への洗脳も行われた。

シハームとハイファによれば、同施設には 28 人の若い女性がおり、その中にはフランス人 3 人、イタリア人 3 人、オランダ人 2 人、その他中東や西ヨーロッパからきた女性が含まれていた。また、彼女らは反抗することが不可能であったと強調する。

公安はシハームとハイファの二人が極秘手段で北朝鮮から東ヨーロッパに出国した後、ベイルートに帰還させ、彼女らから詳細を聴取した。その後、駐レバノン北朝鮮通商代表部部長を召喚して、シハーム・シュライテフとハイファ・サカーファの返還を要求していたレバノン外務省に彼女らの帰還について伝えた。